

イーハトーヴ童話『注文の多い料理店』論

——イーハトーヴ童話における山猫の意義——

The theory of [I—hato—vu] fairy tale 'Restaurant where a lot of orders exist'
——The significance that a wildcat appears in a [I—hato—vu] fairy tale——

高橋直美*

TAKAHASHI Naomi

要旨

宮沢賢治の童話に登場する山猫は「山の怪異の王である猫の妖怪」であり、里猫のように猫の社会を構成せず、裁判官や大明神、人食いの化物など絶対的な存在となっている。

しかも、賢治は作品中に西洋の民話やファンタジー、そして東北地方などの説話や民話をうまくミックスさせて取り込みイーハトーヴ童話をつくり、岩手の民俗性、山森の不思議を余すところなく魅力的に表現したのである。

キーワード：山猫、里猫 猫股、異界 童話、「どんぐりと山猫」、「注文の多い料理店」、イーハトーヴ

1. はじめに

宮沢賢治のイーハトーヴ童話『注文の多い料理店』には、「狼森と笹森、盗森」や「鹿踊りのはじまり」のように自然との原始的な共存から、「月夜のでんしんばしら」や「注文の多い料理店」のような近代的な背景をもつ作品まで幅広い内容の物語が掲載されている。

その特徴の一つに、どの作品にも人間世界と異次元の世界とが併存していることがあげられるだろう。

例えば、「どんぐりと山猫」には一郎少年の暮らす〈町〉の世界と、風が吹くと現れる〈山〉の怪異の世界が平行に存在している。一方、同じく山の異界が登場する「注文の多い料理店」には楽しみのために森の獣を撃って自慢しようとする〈都会〉の若い紳士と、反対にその人間を食おうとする〈山猫〉の怪異のレストラン、すなわち「都会・近代」の世界観と「山・異界」の世界が渾然一体となりながらも強烈におのおの世界観や性格を主張し合っている。また、「水仙月の四日」では、雪山に住む子ども（人間世界）と雪婆んごや雪童子、雪狼の住む北国の脅威である雪の世界とが表裏一体と

* 東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design

連絡先：〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1

化し、怪異の世界にありながらも、人間の子どもに対して友情を抱く雪童子の姿が描かれている。これは『春と修羅』の序に記されている、

わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です
(あらゆる透明な幽霊の複合体)
風景やみんなといつしよに
せはしくせはしく明滅しながら
いかにもたしかにともりつづける
因果交流電燈の
ひとつの青い照明です

という思考法であろう。現象はあくまでも仮定であり絶対ではなく、風景やみんなと一緒に因果律に従いせわしく明滅するものであるが、

けだしわれわれがわれわれの感官や
風景や人物をかんずるやうに
そしてたゞ共通に感ずるだけであるやうに
記録や歴史 あるいは地史といふものも
そのいろいろの論料といつしよに
(因果の時空的制約のもとに)

われわれがかんじてゐるのに過ぎません

とあることから、賢治は我々がその時感じられるものが全てではない、あるいは正しいわけではないと考えていたことがわかる。また、「青森挽歌」で「力にみちてそこを進むものは／どの空間にでも勇んでとびこんで行くのだ」と思考をめぐらせているように、賢治は死後の世界についてもその存在を探っていた。

しかもこのような二つの世界は、見えるものと見えないものだけではなく、人間と動物、人間と自然というような二方向からの視点による二重の世界をも意味している。「無声慟哭」に「わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは／わたくしのふたつのところをみつめてゐるためだ」とあるように、賢治は物事を一方の立場だけではなく、相手の立場にもたって見つけているのである。

大正7年5月19日 保坂嘉内宛書簡に、

食はれるさかながもし私のうしろに居て見てみたら何と思ふでせうか。「この人は私の唯一の命をすてたそのからだをまづさうに食ってゐる。」「怒りながら食ってゐる。」「やけくそで食ってゐる。」「私のことを考へてしづかにそのあぶらを舌に味ひながらさかなよおもへもいつか私のつれになつて一緒に行かうと祈ってゐる。」「何だ、おらのからだを食ってゐる。」まあ、さかなによつて色々に考へるでせう。

と記しているのも同様である。石井正巳は『『遠野物語』を読み解く』(2009年5月 株式会社平凡社)で、

この「なめとこ山の熊」からわかるのは、人間と熊が対等に生きて、やがて死んでゆく世界が

存在することです（山折哲雄『『遠野物語』と二十一世紀』『『遠野物語』に探る』所収）。そうした関係は、『遠野物語』の「人の熊」と「獣の熊」が戦った話にも見られる精神でした（四十三話）。しかし四十三話の場合には、人と熊の会話や心理を描写することはありませんでした。あのような場面を内面化して書いてゆけば、「なめとこ山の熊」に近づくはずです。『遠野物語』から踏み込んで童話化していったところに、「なめとこ山の熊」の境地が生まれたにちがいません。

（石井正巳『『遠野物語』を読み解く』2009年5月 株式会社平凡社）

と述べているが、賢治の作品には生命の平等とともに、それらのもつ世界への畏敬が感じられる。「山男の四月」の山男は、自分をだまして六神丸にした支那人に対してさえ、「さうしてみると、いままで峠や林のなかで、荷物をおろしてなにかひどく考へ込んでいたやうな支那人は、みんなこんなことを誰かに云はれたのだと考へました。山男はもうすつかりかあいさうになつて」しまう。

昔話や民話の山男は怪力で愚鈍でしかなく、恩返しや復讐をすることはあるが相手の立場でものを考え、相手の苦痛を共有することなどできない。

賢治童話には民話や昔話を基にしている話が多いが、決定的に異なるのは、登場人物がお互いに認め合うことで異次元の空間を自由に行き来できるということである。だからこそイーハトーヴ「民話」ではなく、独特の世界をもったイーハトーヴ「童話」としたのではないだろうか。

ところで、『注文の多い料理店』の中には、雪婆んごや山男など山の怪異が数多く登場するが、それらもまた単なる怪異現象ではなく、独自の世界を形成している賢治ワールドのオリジナルキャラクターとして人間同様、市民権をもって存在している。

それら怪異の中でも、今回は化石以外では東北地方に存在しない山猫についてその役割を考察する。

『注文の多い料理店』には「どんぐりと山猫」「注文の多い料理店」の二つの作品に山猫が登場するが、東北に山猫は生存しない。反対に、『遠野物語』や『聴耳草紙』には狼（御犬）の話がいくつも載っており、人々の生活の中に密着していたことがわかる。東北の山に住む獣としては山猫よりも狼のほうが一般的なのである。

本稿では作品に「イーハトーヴ」と冠しながら、地元によくの話が伝わる狼ではなく、賢治はなぜ山猫を山の怪異の主として登場させたのかを、作品における猫と山猫との扱い方の違いなどから考察する。

2. 賢治作品に登場する猫及び山猫

宮沢賢治には、大正8年5月と書き込みのある「猫」という作品がある。

（四月の夜、とし老った猫が）

友達のうちあまり明るくない電燈の向ふにその年老った猫がしづかに顔を出した。

（アンデルゼンの猫を知ってゐますか。

暗闇で毛を逆立て、パチパチ火花を出すアンデルゼンの猫を。）

実になめらかによるの気圏の底を猫が滑ってやって来る。

（私は猫は大嫌ひです。猫のからだの中を考へると吐き出しさうになります。）

猫は停つてすわつて前あしでからだをこする。見てみるとつめたいそして底知れない変なものが

猫の毛皮を網になって覆ひ、猫はその網糸を延ばして毛皮一面に張ってゐるのだ。

(毛皮といふものは厭なもんだ。毛皮を考へると私は変に苦笑ひがしたくなる。陰電気のためかも知れない。)

猫は立ちあがりからだをうんと延ばしかすかにかすかにミウと鳴きすると暗の中へ流れて行った。

(どう考へても私は猫は厭ですよ。)

という、短いものである。友達の家の猫は年老いて、すると暗の中へ流れていくような不気味さがあり、この世のものとは思えない妖怪じみた感じがする。

猫の毛皮にこもる静電気は「セロ弾きのゴーシュ」にも、

すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチッと眼をしたかと思うとぱっと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだをぶっつけましたが扉はあきませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風にあわてだして眼や額からぱちぱち火花を出しました。

と記しているが、賢治はこの作品の中で、猫は静電気を起こすだけでなく気分屋で横柄で自己中心的な存在として登場させ、作品に登場する他の動物たちとは全く違う扱いをしている。

このほかにも、かま猫(竈猫、釜猫とも)・三毛猫・黒猫・ぜいたく猫等の猫の世界を描きながらも、その内実は役人社会や役人根性を批判した作品だと一般に評価されている「猫の事務所」も、猫の世界が舞台となっている作品である。

またその一方で、「どんぐりと山猫」では裁判官の山猫が、「注文の多い料理店」では人食い山猫が、「蜘蛛となめくぢと狸」では山猫大明神やその呪文である「念猫」「なまねこ」が山の異界の信仰として登場し、また「ポラーノの広場」では悪巧みをする山猫博士の異名をとるボーガント・デストゥパーゴが登場するなど、賢治の作品には猫および山猫が登場する作品は多いが、「猫」という小品で述べられているように、賢治自身は猫があまり好きではなかったようである(賢治はまた犬も嫌いだったと言われている)。

3. 賢治作品の中の猫

古来、年老いた猫は死やあの世と結び付けて考えられることが多く、純粋な猫股以外にも火車という葬式や墓場から死体を奪う妖怪になるとも考えられており、これらの話は全国に事例があるという(『日本妖怪大事典』村上健司 角川書店 平成20年4月)。

花巻近郊では『遠野物語拾遺』113に、「綾織村から宮守村に越える路に小峠という処がある。その傍の笠の通という山にキャシャというものがいて、死人を掘起こしてはどこかへ運んで行って喰うと伝えている。また、葬式の際に棺を襲うともいい、その記事が遠野古事記にも出ている。その怪物であろう。笠の通の附近で怪しい女の出で歩くのを見た人が、幾人もある。その女は前帯に赤い巾着を結び下げているということである。宮守村の某という老人、若い時にこの女と行き逢ったことがある。かねてから聞いていたように、巾着をつけた女であったから、生捕って手柄にしようと思ひ、組打ちをして揉み合っているうちに手足が痺れて出して動かなくなり、ついに取遁してしまつたそうなの。」

とあり、この「キャシャ」とは前述の妖怪・火車であることがわかる。

この火車については、『北越雪譜』（鈴木牧之）二編卷三「北高和尚」にも、

むかし天正の頃雲洞庵十世北高和尚といひしは学徳全備の尊者にておはせり。其頃此寺にちかき三郎丸村の農家に死亡のものありしに、時しも冬の雪ふりつゞき雪吹もやまざりければ、三四日は晴をまちて葬式をのばしけるに晴ざりければ、強ていとなみをなし、旦那寺なれば北高和尚をむかへて棺をいだし、親族はさら也人々蓑笠に雪をしのぎて送りゆく。その雪途もやゝ半にいたりし時猛風俄におこり、黒雲空に布满て闇夜のごとく、いづくともなく火の玉飛来り棺の上に覆かゝりし。火の中に尾はふたまたなる稀有の大猫牙をならし鼻をふき棺を目がけてとらんとす。人々これを見て棺を捨、こけつまるびつ逃まどふ。北高和尚はすこしも惧るゝいろなく口に咒文を唱大声一喝し、鉄如意を挙て飛つく大猫の頭をうち玉ひしに、かしらや破れけん血ほどはしりて衣をけがし、妖怪は立地に逃去りければ、風もやみ雪もはれて事なく葬式をいとなみけりと寺の旧記にのこれり。此時めしたるを火車おとしの法衣とて今につたふ。（中略）

本文に火車といふは所謂夜叉なるべし、夜叉の怪は唐土の書にもあまた散見せり。

とある。猫は変化して猫又になるが、上記のように死体を好んで火車（尾はふたまたなる稀有の大猫）にもなる。

ところで、猫に関する昔話には二通りある。一つは報恩譚、もう一つは人喰い譚である。

報恩譚には、俗に「猫檀家」と言われる話型があり、賢治の住む岩手県では二戸郡浄法寺町の福蔵寺に伝わる話が有名である。これは、慶長4年、南部藩主信直公の葬儀の際、突然棺が空中に舞い上がったが福蔵寺の住職大突和尚が念じて棺を戻し、その功績により寺領30石を与えられたというものである。その際に和尚が可愛がっていた猫が力を貸したため、それに感謝して猫塚を築いたと伝えられている。

この「猫檀家」とは、和尚に飼われていた猫がその呪力により寺の檀家を増やして恩返しをするという昔話で実在の寺に伝えられていることが多いが、ことに東北地方には多く残っている。話型としては飼い猫が和尚と計り「ナムトラヤ、云々」の祈祷呪文により空中から棺桶が降りてくるものが中心となっており、佐々木喜善の『聴耳草子』にも「虎猫と和尚」という話で収録されている。

また、奥州市水沢区の奥の正法寺にはその昔、正法寺の和尚の飼い猫が仲間と一緒に、天井裏に住む大鼠から和尚を守るため格闘し、大鼠を討ち取るとそのまま息を引き取ったという伝説があり、和尚がこの二匹の猫を弔うため境内に塚を建てて供養し、現在も「猫塚」として伝えられ守られている。これは『閑窓瑤談』にある遠江榛原郡御前崎にある猫塚などと同類の話であり、猫の報恩譚の多くはみな寺に関係している（同上『日本伝奇伝説大事典』）。

これらの話は猫が死体を盗むという火車（遠野のキャシャ）の説話が元になっており、猫よけのために死体に刃物を置くという話や、猫が死体をまたぐとその死体が起き上がる話が各地に伝わっていることから、葬制と猫との関係に基づく習俗が関係しているといわれている（『日本伝奇伝説大辞典』角川書店 昭和61年10月）。

このように、猫は変化もすれば、死体も好み、また、死体を運ぶなど死と密接に関係した動物である。死の世界を異界と考えれば猫もまた現実世界と異界とを跨いだものであり、家猫として生活しながらも年を経ると怪異となる化け猫（猫股）はまた、人間社会と異界を股にかけている存在であると

いえよう。

しかも多くの猫股は人語を話し、二本足（後ろ足）で歩き、踊りを踊るなど人間同様のしぐさをするなど、猫は人間にもっとも密着した動物であるといえる。

猫が登場する賢治作品としては、前述の「猫」、「鳥箱先生とフウねずみ」、「猫の事務所」がある。この中で、猫の妖異性、嫌悪感を描いた「猫」を別にすると、「鳥箱先生とフウねずみ」は人間社会と似た衆愚や力による支配があからさまに描かれ、賢治の教育批判が述べられていると評価される作品である。また、「猫の事務所」では役人根性の嫌らしさを差別やいじめを中心として描かれ、結局は上下関係に終始してしまう役人世界を描いていると評価されている。

「鳥箱先生とフウねずみ」には、

その時、まるで、嵐のやうに黄色なものが出来て来て、フウをつかんで地べたへたゝきつけ、ひげをヒクヒク動かしました。それは猫大将でした。

猫大将は、

「ハッハッハ、先生もだめだし、生徒も悪い。先生はいつでも、もっともらしいうそばかり云つてゐる。生徒は志がどうもけしつぶより小さい。これではもうとても国家の前途が思ひやられる。」と云ひました。

と猫大将が登場し、「猫の事務所」では、

その時です。猫どもは気が付きませんでした。事務長のうしろの窓の向ふにいかめしい獅子の金いろの頭が見えました。

獅子は不審さうに、しばらく中を見てゐましたが、いきなり戸口を叩いてはひつて来ました。猫どもの愕ろきやうといつたらありません。うろろうろうろそこらにあるきまはるだけです。かま猫だけが泣くのをやめて、まつすぐに立ちました。

獅子が大きなしつかりした声で云ひました。

「お前たちは何をしてゐるか。そんなことで地理も歴史も要つたはなしでない。やめてしまへ。えい。解散を命ずる」

かうして事務所は廃止になりました。

と獅子が登場する。間違つた教えや不当な仕打ち、役人根性は確かになくさなければならないが、それを絶対的な力で解決することが本当に良策かどうかは別問題であり、そのため「ぼくは半分獅子に同感です。」として半分は否定せざるを得ないと賢治は考えているのである。

このように、賢治は獅子や特別な猫である猫大将を、その社会における「力」の象徴として登場させている。

4. 猫の怪異

上記「猫の事務所」に登場する猫社会であるが、日本やアイルランドの伝承や民話には猫王を中心とした猫の世界が登場する。

九州の熊本県阿蘇山根子岳（猫岳）は「根子嶽ハ猫ノ窟ニ登ル山ナリ、依テ猫嶽ト云フ、人家ノ猫ノ年ヘヌレバトンニウスル事アリ、是則窟ニ行タリト云、又猫嶽ニテ豹程ノ猫ヲ見タリ鹿程ノ猫尾ハ

八尺アルナド、皆々幼童ノ戯ナルヘシ、何ゾ此山ニ猫ノ謂ナシ」と『南郷事蹟考』（1866、長野内匠俊起）に記され（『日本歴史地名体系』2001年10月24日 株式会社平凡社）、猫の王が住むといわれている。

また、除夜あるいは節分の夜に猫が集まって会議を開くとか、「猫岳参り」の猫は猫岳で修行し、出世して化ける力をつけて里猫の頭領となったという話などもある。しかも猫岳山中には猫屋敷があり、道に迷った旅人をかどわかしては下働きの猫に変えたともいわれており、現在も登山口の谷間には「ヤカタガウド」の地名が残っている。

また、「鳥箱先生とフウねずみ」、「猫の事務所」に登場する猫はすべて家猫であり、同様に猫大将や獅子も猫社会の構成員（普通の動物）であるのに対して、猫王は猫岳という異界に常住しており、猫岳参りの家猫のように里には帰らず、山に独自の怪猫世界を形成している。

ところで、二足歩行をして人語を操る猫として有名な「長靴を履いた猫」のモデルは、アイルランドの伝説に登場する妖精猫ケット・シー（Cait Sith）であるともいわれている。ケット・シーにもまた、猫の王様があり、その猫の国の王様を決めるアイルランドの民話も伝承されている。また、犬の妖精クー・シーが妖精の家畜として外見以外は通常の犬に近い性質を持つのに対して、ケット・シーは人語を話し二本歩行をするなど、人間的な様相を呈しているのも日本の猫又と共通する。

賢治作品に登場する山猫もまた、上記のケット・シーや猫股のような特徴を備えているため、様々な山猫の説話や伝承と同様に読むことができる。そのため賢治作品は『注文の多い料理店』の広告文にあるよう、

イーハトヴは一つの地名である。強て、その地点を求むるならばそれは、大小クラウドたちの耕してゐた、野原や、少女アリスが辿つた鏡の国と同じ世界の中、テパーンタール砂漠の遙かな北東、イヴン王国の遠い東と考へられる。

実にこれは著者の心象中にこの様な状景をもつて実在したドリームランドとしての日本岩手県である。

として成立している。『不思議な国のアリス』に登場する白ウサギ（White Rabbit）やチェシャ猫（The Cheshire Cat）たちが不思議の世界を構成しているように登場人物（動物・妖怪）が独自の作品世界を構成し、また、グリム童話やロシア民話などと同様に岩手の豊かな地域性や民俗性や民話と賢治ワールドのオリジナルキャラクターを持った登場人物とが交じり合い、イーハトーヴ「童話」として成立しているのである。

5. 賢治童話の山猫について

前述の猫王は「虎のような」と形容されているが、虎自体は日本の山野に生存しない。しかし、「古家の漏り」という昔話では怖い動物として登場する話型も多く、佐々木喜善の『聴耳草紙』にも遠野版「古谷の雨漏り」として虎が登場する。地方によっては狼や虎狼などが登場する場合もあり、とりあえず動物の中で一番恐ろしい存在とされている。

一方、賢治作品では猫大将や獅子が「力」の象徴として登場するが、「どんぐりと山猫」や「注文の多い料理店」では「山の異界の力」の象徴として山猫が登場する。

たとえば、「どんぐりと山猫」は木々や滝などが人語を話す山中の異界を主な舞台とした話であり、「注文の多い料理店」は山中の異世界での食う側と食われる側との境界を描いた作品で、人食い山猫の待つ最後の部屋には「死」が待っているという設定になっている。

ところで、「どんぐりと山猫」で、「めんどなさいばん」をいとも簡単に片付けた一郎に対して、「いえ、お礼はどうかとってください。わたしのじんかくにかかりますから」といいながらも、山猫は一郎に対してその後二度と葉書を出さなかった。その理由を考えたい。

一郎は礼儀正しく優しい少年である。異界の裁判においても、「そんなら、かう言ひわたしたらいいでせう。このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなつてゐないやうなのが、いちばんえらいとね。ほくお説教できいたんです。」と人間世界の基準を用いて鮮やかに裁いた。必死で三日も自己主張をしていたどんぐりの立場に立てば自らの価値観を全面否定されたことになる。しかもここは山猫の判決が絶対である法廷のために、「どんぐりは、しいんとしてしまひました。それはそれはしいんとして、堅まつてしま」うしかなかった。一瞬にして自分の価値観や個性が否定され、自分とはま逆な理想モデルが外部から勝手に持ち込まれ、それに沿って決められてしまったから、どんぐりは呆然としたのである。もちろん、反対にどんぐりが自分の愚かさを知り呆然としたとする解釈もあるだろうが、これを寓話としてではなく童話として読めば、また賢治の気性から考えれば、どんぐりの愚かさをただ打ちのめし、一郎の優等生ぶりを示すだけの作品ではないということが推理できる。

確かに一郎は優等生であるが、それは人の世界の一般として一面的にみたものであり、どんぐりの立場に立ったものではない。

もちろん、山猫はどんぐりの裁判に四苦八苦しながらも、どんぐりのために一番公平だと思える判決を求めていた。が、一郎の下した判決はどんぐりたちをがっかりさせただけだったのである。そして、自分を認めてもらえなかったどんぐりたちは、その基準が一般化している人間の社会へと近づくに従って、平凡な茶色のどんぐりになってしまうのである。

都会と農村という地域的・職業的な格差が、そのまま子どもたちに大きな影響を及ぼした時代である。特に東北の貧しい農家の子どもたちは都会の子どもたちのように上級学校に通うことはもちろん、思うように勉強することさえもできない状況にあったが、賢治は「農民芸術概論要綱」に「都人よ来てわれらに交れ 世界よ 他意なきわれらを容れよ」（農民芸術の興隆）や「個性の異なる幾億の天才も並び立つべく斯て地面も天となる」（農民芸術の産者）と述べ、子どものみならず個々人のもつ様々な個性や可能性の発露を重視した。

しかしながら、現実の社会は賢治の理想と異なり、『注文の多い料理店』の広告文に「必ず比較をされなければならぬいまの学童たちの内奥からの反響です。」とあるとおり、すべてにおいて比較をされなければならない。

この物語は優等生の一郎とくだらない自己満足のための背比べをするどんぐりとの比較を描いたと解釈することも可能であるが、それは前述の通り賢治の本意ではないと思われる。それよりも、人間社会では比較対照され軽蔑されるよう存在であっても、世界観を変えればその個性を主張し、自分に誇りを持って存在できるのだとは読めないだろうか。

一郎に賛同した山猫も実はどんぐりと同じ異界の存在である。比較対照される一郎の人間世界の基準を用いれば、異界の権力者である山猫もどんぐり同様人外のものでしかない。自然を征服し、人間

を頂点においた近代社会においては、人外のものはたとえ神霊であろうが、社会的に重要であり、高貴なものでない限り人間に征服されるような形が好まれ、この最たる例が零落した神霊を妖怪として語り継ぐというシステムだからである。(今野圓輔「妖怪」1959年)

山猫と一郎とのやり取り、

「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事これありに付き、明日出頭すべしと書いてどうでせう。」

一郎はわらつて言ひました。

「さあ、なんだか変ですね。そいつだけはやめた方がいゝでせう。」

山猫は、どうも言ひやうがまづかつた、いかにも残念だといふふうに、しばらくひげをひねつたまゝ、下を向いてゐましたが、やつとあきらめて言ひました。

「それでは、文句はいままでのとほりにしませう。そこで今日のお礼ですが、あなたは黄金のどんぐり一升と、塩鮭のあたまと、どつちをおすきですか。」

「黄金のどんぐりがすきです。」

山猫は、鮭の頭でなくて、まあよかつたといふやうに、口早に馬車別当に云ひました。

「どんぐりを一升早くもつてこい。一升にたりなかつたら、めつきのどんぐりもまぜてこい。はやく。」

は、一郎（人間社会）と山猫（山の異界）との互いの世界観の違いを表している。山猫にとって自分の世界の裁判所は絶対であるから「用事これありに付き、明日出頭すべし」でよいと思ったのに対し、一郎は人間の世界からの客人として、自分が山猫の部下のような扱いはおかしいと感じた。両者はお互いに属する世界が異なるので、世界観の違いやものの受け止め方の違いがあるのは当然である。それよりも重要なのは、一郎も山猫も対等の世界に存在しているということである。

結局、山猫は一郎の論理に感心しながらも、その根底にある人間社会の比較論が、結局は怪異である自分の存在をも見下す結果になると気づいたために、山猫は二度と葉書を出さなかったのではないだろうか。

ところで、前述の通り一般に怪猫（特に猫股）の説話は大きく報恩譚（さらに広く言えば、人との友好）と人食い譚とに分かれており、「どんぐりと山猫」には一郎に対して紳士的な山猫が登場し、「注文の多い料理店」は人食い山猫が登場するので、イーハトーヴ童話『注文の多い料理店』には怪猫の話型が両方とも揃っていることになる。

さらに言えば、「どんぐりと山猫」にはきのこの馬車など山猫の妖術も見られるが、一郎が山猫を探す道すがら登場する不思議な案内人たちは山猫の妖術ではなく純粋な「山の怪異」であり、一方の「注文の多い料理店」は全てが山猫の妖術である。一郎が山の怪異を認めそれと対等な関係を築いている山に歓迎された客であるのに対し、狐に來た若い二人の紳士は山の敵である。ゆえに山に守られることもなく、まんまと山猫の術にはまってしまう。賢治作品に登場する怪異はつねにその存在する世界である「山」との関係なしにはありえないのである。

ところで、宮城県の田代島は柳田國男の「弧猿隨筆」にある「猫の島」（昭和14年10月）に登場する猫の多い島である。田代島はかつて養蚕が行われていたため、蚕の天敵である鼠を駆除するために猫が飼われており、島民から大事にされていたといわれている。そして、ネコの動作などから天候や

漁模様などを予測する風習が生まれ、美与利大明神という猫神を祀る小さな社もできたという。

「蜘蛛となめくちと狸」に登場する山猫大明神も、東北地方に伝わるこのような猫を祀る発想から生まれたのかも知れない。これが山犬（狼）であれば、遠野には狼の話が多く残されていることや、秩父の三峰神社や宝登山神社、山梨県の金桜神社、東京都の御嶽神社などにみられる山犬信仰が考えられるが、賢治の場合は山犬（御犬）信仰ではなく、あくまでも山猫大明神なのである。

山犬信仰と異なり、実際の猫神信仰は養蚕や漁業などの職種に多くみられるほかは、民話や伝承に登場する報恩話か怨念封じが縁起となっている寺に伝わる程度でしかない。

ところで、『遠野物語拾遺』にある猫が人語を話して、踊りを踊り、それを話した人間の咽笛を咬み切って殺した話（174）や子どもを食い殺した話（175）などはいずれも虎猫の仕業であり、「ナムトラヤ」の報恩猫も虎猫である。一方、猫股が山の主になった例として、会津に伝わる志津倉山の怪猫（カシャ猫）や猫魔ヶ岳の猫王の話が有名である。

賢治はこの虎猫と猫股（賢治童話では山猫）とをうまく組み合わせ、「猫檀家」の題目である「ナムトラヤ」の呪文を「蜘蛛となめくちと狸」に組み入れている。「ナムトラヤ」は「南無虎や」であり、虎猫の「とら」に「南無」をつけたものであるが、この「トラ（虎猫）」を「ねこ（猫）」に変えると、「蜘蛛となめくちと狸」の山猫大明神への唱題である「なむねこ」になり、それが「やまねこ」と合体して「なまねこ」となっている。

「南無阿弥陀仏」は阿弥陀仏に（仏）に帰命する念仏であるのに対し、「南無猫」は（山）猫に帰命する念猫になる。そしてこの山猫大明神に帰依したものは皆、狸に食われてしまうため、この山猫大明神は信者の身体をあの世界へと送るシステム、すなわち、火車のように猫が死体をあの世界に運ぶのと同じ役割を果たしている。

また『宮沢賢治 名作の旅』（渡辺芳紀 平成5年 12月 至文堂）にあるように、一般的には「どんぐりと山猫」の舞台は早池峰山から薬師岳付近にかけてとされているが、遠野をはじめとするこの地域は養蚕を行っていた集落が多かった。そのため、蚕を守る猫の存在を、異界を守る絶対的な存在である裁判官を山猫としたのではないかと考えられる。

当時、柳田が『遠野物語』に述べたように山と里では異なる社会があると考えられており、平地人という言葉も使用されていた。

そして、その山に住む人々は平地人と異なるとして山人といわれ、当初は大和民族とは異種族とも言われていたが、それは『遠野物語』などの民話の世界のものであり、当時実際に暮らしていたのは賢治の作品にも登場する鉱物採掘者、木地師、杣人、狩人、鉄山師、炭焼きの人々であった。

しかし、その一方で谷川健一の『青銅の神の足跡』『鍛冶屋の母』等に見られるよう、山で生活を営む人々の背後には鍛冶屋（製鉄）の神の影がうごめいており、それがあつ種の山の怪異を生み出したとも言われている。

採鉄や鉱山従事者・踏鞴集団などは、移動を繰り返しながらも山に常住し、里の人々との交流はほとんどなかったようである。この踏鞴というのは初期の製鉄法で、踏鞴（フイゴ）を踏んで空気を送り込むものであり、そのため、長年踏鞴を踏むことで片足が萎え、また炎を見つめることで隻眼になること、『古語拾遺』、『日本書紀』、『播磨国風土記』に登場する製鉄・鍛冶の神である天一箇目神が鍛冶屋の神でもあることなどから、一本ダタラや一つ目は山（主に鉱山）に出没するという伝説が生

まれたといわれている。

片目・片足が不自由な馬車別当はその容貌から踏鞴師を髣髴させる。踏鞴師はもちろん人間であるが、市などの限られた交流しか里人と行っていなかったとされ、山人の一種ともみなされており、里人である農耕民とは違った存在と考えられていた。

このように、山猫の馬車別当はいかにも「平地人」（里人）とは異質な存在であるのに対し、山猫はタバコを吞んだりしてなにか人間臭い部分がある。これは山猫が、猫岳の猫の大王のごとく山の異界に君臨しながらも里とのつながりをもった存在、つまり怪異でありながら人間世界にかかわりを持つ特別な存在だからであると考えられるだろう。

前述したとおり、一般的に「どんぐりと山猫」の舞台は早池峰山と南の薬師岳の間を流れる岳川の流域と薬師岳とされているが、奥田博は『宮沢賢治の山旅』（1996年8月 東京新聞出版局）では、「どんぐりと山猫」の舞台として花巻市大迫市にある猫山も挙げている。「風の又三郎」の舞台が大迫や外川目の猫山も候補のひとつだといわれていることを考えれば納得のいく説である。

説話で人を襲う山の動物として狼が代表的であると前述したが、狼の民話には夜の山で狼が集団で旅人を襲う「千匹狼」、その話型として、食い殺した鍛冶屋の老婆に成りすました猫又が千匹狼の首領であり、ついには正体を見破られて殺される「鍛冶屋の姥」が有名である。このことから、民話では、猫股が狼よりも山の怪異の世界では上位に位置していることがわかる。

賢治作品の「蜘蛛となめくちと狸」でも、狼が山猫大明神を信仰するという設定になっており、民話と同様な位置関係になっている。

金子民雄は『山と雲の旅』（1979年10月 れんが書房新社）で、賢治童話の山猫とは「山里の（飼）猫のことであろう」と述べているが、「泊まり山の犬猫」や、「重倉山の人食い猫股退治の話」、「黒部・猫又山由来」などから考えると、賢治童話の山猫は山里の猫ではなく、山の異界に住む怪猫と考えたほうが良いのではないだろうか。

柳田國男は前述「猫の島」で「尋常の野ら猫・山猫の輩が、物陰に陰険な眼を光らせて居るに反して」、「伊豆の八丈では（中略）此島には山猫がたつた一種の山の怪物であって」等、山猫を「怪物」として扱っており、また「狼のゆくへ」（吉野人への書信 昭和8年11月）で、狼と犬との差異を猫と山猫とで比較対照し、

此點は又猫と山猫の關係もやゝ似て居る。（中略）ところが、隱岐の島などに行つて話を聴くと、家猫の或るものは毛衣も元のまゝで、いつの間にか山に入つて山猫となり、兩者全く別々の社会をなして居るといふ。さうして一方は國地の狐などのやうに、通行人を脅し又は誑かすと云つて怖れられて居る。

と述べて、山猫を山に入った家猫であるとしているが、賢治童話に登場する山猫は妖力をもっているため、実際の猫ではなく山の怪異（妖怪）である。

賢治の描く山猫はまた、島木健作の「黒猫」に、「その近頃の号にある博士の樺太旅行談が連載されていてそれが私には面白かった。そのなかの絶滅せんとしつつある樺太オオヤマネコの話、というのが強く私の空想を刺戟した。」と記されているような寓意でもない。

要するに、我々とは次元の異なった山の異界で彼らなりの生活を営む妖怪変化なのである。だからこそ、役人根性とその社会を里猫（家猫）で描いた「猫の事務所」にはネコ科で百獣の王である獅子

(ライオン)は登場するが、山猫は登場できないのである。

以上のことから、「どんぐりと山猫」「注文の多い料理店」等に登場する山猫は、山の異界の頂点に立つ力(暴力や権力も含む)のある存在として賢治童話では設定されていると考えられるだろう。

しかしその一方で、実際のオオヤマネコは賢治の生きた時代に樺太に生息していたことも確かである。オオヤマネコ(ヨーロッパオオヤマネコ=リンクス)は、ヨーロッパからシベリアに棲息し、またそのごく近縁種のカナダオオヤマネコが北米大陸北部に棲息している。ヨーロッパでは、ヨーロッパヤマネコについて人に馴染み深いヤマネコだといわれているが、このオオヤマネコは3~1万年前から縄文時代の中期~後期頃(5~3千年前)まで日本に野生していたということは遺跡からも証明されており、北海道大学北方資料室にある『写真集樺太』(国書刊行会、写真帖406-284)の「明治大正期北海道写真目録(明治大正期の北海道・目録編)」(レコードID0B054780000284000)にはオオヤマネコの写真が掲載されている。

ところで、「どんぐりと山猫」で山猫が一郎を呼び出した時刻はオオヤマネコの活動時間である夕方であるが、小学生が夕方に山へ入ることなど普通はありえないため、賢治はわざと怪異の出没しやすい夕方(黄昏時)を設定したと考えられる。このことから、「どんぐりと山猫」は寓話ではなく、人間と怪異との関係を描いた童話であると言えるだろう。

また、オオヤマネコ(lynx)の名は、「光」を意味するギリシャ語に由来し、照度の単位ルクス luxとも同根であり、これはオオヤマネコの眼がかすかな光でもよく見えることに由来している。そして、視力の鋭さを観察眼の鋭さとした「オオヤマネコの眼」(lynx-eyed)は「眼の鋭い」ことを意味する言葉でもある。山猫が裁判官である理由も、その観察眼によると思われる。

オオヤマネコは群れを作らず単独で行動するのが常である。「どんぐりと山猫」の山猫は一匹、「注文の多い料理店」は親分子分合計で3匹の山猫が登場するだけで、賢治童話の山猫は「猫の事務所」のように社会を形成しないのである。

一方の里猫(家猫)は「猫の事務所」では官僚社会の、「鳥箱先生とフウねずみ」では教育のあり方の寓意になっており、童話として成立している山猫の世界観とは異なっている。

最後に、「ポラーノの広場」の山猫博士であるが、この山猫はヤマネコ釣りを商売にしていることでついたあだ名であって、本人が山猫というのではない。

5. まとめ

今野圓輔「妖怪」(1959年)によると、妖怪の出現目的は、幽霊のように人間に恨みを晴らすなど悪意を持つてのことではなく、単に神霊の威力を示し、それを認めさせる(畏敬させる)ことであるという。これは、神や精霊が零落すると妖怪になるという説にも通じている。

しかし、人知が発達すると、素朴な前近代的なものへの不信が強くなり、人間が自然を制御するようになるため、身近で卑賤な神霊は人間に征服されるような形が好まれるようになり、零落した神霊が妖怪として語り継がれたとされている。

これはまた、妖怪の出現場所が特定されていることとも通じており、妖怪が決まった場所に出現するのは日本の神々が社殿に祀られるようになり、遊行する性質がみられなくなったためであるという。

賢治童話の世界では妖怪が妖怪らしく生き生きと活動しているが、それはあくまでも山の異界に限定されており、誰でもがそこに行けるわけではない。山と里の間には、二つの世界を隔絶する、目には見えない絶対的な境界が存在しているのである。

そして、賢治童話では山の異界の力の頂点に君臨するものとして山猫が登場するが、里猫のような猫の社会は構成しない。

賢治は作品に西洋の民話やファンタジー、そして東北地方の説話・民話、東北の風土・民俗をうまくミックスさせて取り込み、イーハトーヴ民話ならぬイーハトーヴ「童話」として岩手の山森を舞台に不思議な異界の物語を描いたのである。しかも、その童話は単なる物語ではなく、登場する人物個々に個性とその存在する世界や理由を持たせ、どのようなものであろうとその存在を平等に尊重する視点から描かれた童話なのである。

国内外の童話や民話を愛し、郷土を愛した賢治は、自らの作品を「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。」(『注文の多い料理店』序)と述べ、賢治の心象に思い描かれるさまざまな歴史や生活のつまった郷土の風景を「イーハトーヴ童話」として、「ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたないということ、わたくしはそのとおり書いた」(同上)のである。

賢治童話が愛される要因は、確かにその物語の面白さにあるが、実はその奥に潜む全ての存在に対する慈愛と尊敬が我々の心を癒してくれるからではないかと考えられる。

参考文献

- 『校本宮沢賢治全集』昭和51年6月 初版2刷 株式会社 筑摩書房
『定本 柳田國男集』昭和53年4月 第14冊 株式会社 筑摩書房
関敬吾『日本昔話大成』昭和54年5月 株式会社 角川書店
小松和彦『怪異の民俗学』2000年7月 河出書房新社
『谷川健一著作集』1995年11月 第1版第3刷株式会社 三一書房
『日本民俗学体系第8巻』(平凡社 1959年)
『日本を知る事典』1998年 社会思想社
『日本伝奇伝説大辞典』昭和61年10月株式会社 角川書店
『日本民俗辞典』昭和53年4月 株式会社 弘文堂
『日本歴史地名体系』2001年10月 株式会社 平凡社
『日本説話伝記大事典』平成12年6月 勉誠堂出版株式会社
渡辺芳紀『宮沢賢治大事典』平成19年8月 勉誠出版株式会社
原子朗『新宮沢賢治語彙事典』1999年7月 東京書籍
石井正巳『遠野物語辞典』2003年6月 有限会社 岩田書院
『日本妖怪大辞典』2008年4月 5刷 株式会社 角川書店
柳田國男『(谷川健一解説) 遠野物語』2010年5月 大和書房
赤坂憲雄『『注文の多い料理店』考—イーハトーヴからの風信—』1995年4月 五柳書院
金子民雄『山と雲の旅』1979年10月 れんが書房新社
花部英雄『呪歌と説話—歌・呪い・憑き物の世界—』平成11年4月 第2刷 株式会社三弥井書店
石井正巳『『遠野物語』を読み解く』2009年5月株式会社平凡社
湯口康雄『黒部奥山史談』1992年12月 桂書房

- 八岩まどか『猫神様の散歩道』2005年6月 青弓社
島木健作「黒猫」(安野光雅『動物たちの物語』1989年1月 筑摩書房)
佐々木喜善『聴耳草紙』2010年5月 ちくま学芸文庫
『柳田國男集 幽冥談』2009年5月 ちくま文庫
日野巖『動物妖怪譚上・下』2006年12月 中公文庫
湯本豪一『明治妖怪新聞』2003年2月 柏書房
湯本豪一『明治妖怪ニュース』2001年6月 柏書房

The theory of [I—hato—vu] fairy tale 'Restaurant where a lot of orders exist'
——The significance that a wildcat appears in a [I—hato—vu] fairy tale——

TAKAHASHI Naomi

The “wild cat” written by Kenji Miyazawa’s fairy tails is “a monstrous creature of a cat which a monstrous king in mountain.”

And without composing a cat’s society like the hometown cat, it is absolute existence such as a judge, large gracious deity, the monster who eats a person, etc.

Moreover, Kenji mixed the folktales of the West, the fantasy, and the legends in the Tohoku region and made “i-hato-vu” fairytales in his works.

Further, Kenji expressed the folk customs in “Iwate” and the mystery in the mountain-Thoroughly and attractively.

Keywords : Wildcat,Black cat,Cat's apparition,The mysterious world,Fairy tale,Acorns and wildcat, Restaurant where a lot of orders exist,I-hato-vu

